

## 第1章 序論

### 1-1 研究の背景

私たちは自分の周りを取り巻く世界を、さまざまな方法で認識している。目に映るものに対して、何らかの印象を抱いたり、また何も感じずに見過ごすこともある。例えばいつも買い物に行く商店街なら、日常的に見る景色の中に「いつもと変わらない安心感」や「季節の変化による違い」などを見い出すことがある。しかし初めて訪れる旅行先で見えるものに対して感じることは日常の中から受ける印象とは異なる場合もある。

ところで「認識」という言葉は、「物事の本質を十分に理解し、その物と他の物とをはっきり見分けること（心の動き）」<sup>1)</sup>と定義され得るが、本研究ではここで定義されているようにある対象と別の対象とを区別するという意味合いよりも、対象となったもの自体に対するひとつの見方や感じ方というような広い意味で用いる。また、本研究で用いる「環境」という言葉は、「身の周りを取り巻く世界全体」を意味する。つまり、目に見える物事、鼻で匂う大気、聞こえる音、それらすべてである。従ってここでは「環境認識」という言葉は個人における身の周りの世界に対する見方や感じ方、と定義する。さらに本研究の「環境認識」は、「個人が環境に対する認識をあらわす手段」として環境に意味付けをする“名づけ”という行為を通じてなされるものである。“名づけ”については1-1-3で説明する。

#### 1-1-1 考現学における路上観察という手法

ここで、環境を認識する方法として「路上観察」を扱う。路上観察とは、まちを歩く際にものごとを「観察」する視点を持って歩くことである。「面白い現象」の採集を楽しみに街歩きをする<sup>2)</sup>という姿勢を基本的に持ち、採集したものはさまざまな方法で記録する。この行為はそもそも、現在の世相や風俗のすがたをとらえることを目的とした「考現学」と呼ばれる分野を発端としている。大正時代末期の関東大震災のとき、今和次郎と吉田謙吉の二人は東京の被災地をスケッチブックを持ってまわり、バラックをスケッチによって記録した。その後今和次郎は調査の対象を都市に広げた。ランプや垣根といったつくりものから銀座カフェの女給の服装にいたるまで、彼らの調査項目は多岐に渡る。



図 1-1 今和次郎による駄菓子屋のスケッチ<sup>3)</sup>

今和次郎が目指した考現学は、統計という方法により分析する形をとる。調査により得ら

れた統計から、場所と時間という二つの軸において比較考察をすることから世相を読み取るという考え方である。また、今は考現学が他の学問分野に応用されることを願っていた。考現学自体を学問の一分野と位置付けることが可能か否かということについては一概に言えないが、今は考現学の手法自体に、多くの可能性があると考えていたのである。世相の理解は人々の生活の把握に通じる。生活財生態学<sup>4)</sup>といった調査・研究はその代表的な一例である。さらに「観察」という立場から身近な環境を見直すための研究の方法としても考現学をとらえることが出来る。現在自然観察を目的とした市民団体は数多く存在するが、その目的はさまざまでも「対象をよく見ようとする姿勢」は考現学的視点に近い。

### 1-1-2 路上観察の意義

路上観察は始めるために何の準備もいらない。必要なのは「風景やものをよく見ようとする姿勢」である。しかし意識的にまちを見て歩くのにも、ただ歩くのではなくより楽しむ方法がある。そのうちの一つが「記録すること」である。



図 1-2 転用物の一例（植木の鉢）<sup>6)</sup>

図 1-2 は名古屋の野外活動研究会<sup>5)</sup>会員の記録である。これは様々な生活用品が植木の鉢に転用されているものを集めている。このようにまち歩きをする中で、ひとの生活の工夫を見つけることもある。まち歩きを好んでする人たちは風景を見る楽しみ方をよく知っている。

目に見えるものの断片を採集し記録する、考現学を土台とした路上観察は「見て・感じる」ことを促進する。その目的はそれぞれ異なっても、まちは常に流動的であり、新しい感動を与えてくれる。そのことがまち歩きの活動の魅力であり、長続きする理由であると考えられる。

### 1-1-3 “名づけ”という仕掛け

私たちは日常の中で、ある対象に名前を付けることがある。子供の命名というような一

表1-1 命名行為の特徴

命名行為の特徴
1. 新しい事物の発生に関わる
2. 対象事物を他の事物と区別し分類の基準を作る
3. 他人に伝える働きをもつ

種儀礼的なものから、ものの呼び名に至るまでいろいろな“名づけ”をしている。名前を付けるという「命名行為」について、吉岡は次の表<sup>7)</sup>を示した。

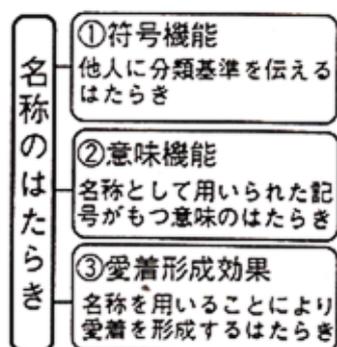
この表は“名付ける”ことがどんな特徴を持つのかをまとめている。そして日常において、名づけられた名前は使われることで定着し、また自分との関わりをとらえる一つの道しるべとなる。

「名づけるとは、物事を創造または生成させる行為であり、そのようにして誕生した物事

の認識そのものであった」<sup>8)</sup>とあるように、名づけを通じて私たちは世界を認識し、理解しているのである。更に、「ある空間や場所への命名が、ただの標識ではなく、人々のそれに対する感覚や願望を要約し、生活経験の痕跡をとどめるものであるとすれば」<sup>9)</sup>名前は単純な呼び名以上の意味を持つと言える。

名づけはまた、学問の中でも重要な意味付けをされている。民俗学の立場からは「名づけることは“所有する”こと」<sup>10)</sup>と捉えられており、環境社会学の立場からは「名づけは、自然環境とのかかわりの象徴である」<sup>11)</sup>と捉えられている。このことから、“名づけ”行為はその背景に多くの意味を担っていることが分かる。

また名前の持つ働きとして、吉岡は次の図を示した。



例えば人名に関して、「名前やニックネームの分析を通じて文化や社会構造そしてそれらの変化がよりよく理解できる」<sup>13)</sup>のは図の ① や ② のはたらきから言えることである。あだな（呼び名）は基本的に相手に対する親しみを示すものであり、③ の効果がある。人名に限らず場所の名称やキャラクターの名前などについても同様のはたらきを読み取ることができる。

図 1-3 名称の3つのはたらき<sup>12)</sup>

以上の背景から、ひとが対象に対して感じることやイメージすることが“名付け”という仕掛けによって表現され、思いや感覚をその名前の中に織りこむことで対象により近づくことが可能となる。

#### 1-1-4 まちづくりとしてのまち歩きの位置付け

近年、「あるく」ことがさまざまな観点から注目されている。それは健康促進のためのウォーキングや、環境学習の一環としてのまち歩きなどである。日常生活で自転車や車をよく利用する場合、ある程度の距離を「あるく」ことは意欲的にしない限りあまり機会がない。それでも「あるく」ことに関心が高まる背景には、忙しい現代社会に求められている「ゆとり」という概念や、ライフスタイルの見直しなどが挙げられる。

また、行政の取り組みとしてのまち歩きは“まちに愛着を持ってほしい”という願いがこめられており、住民に地域への関心をより深く持ってもらうという意図が読み取れる。住民自身が直接体験としてまちを歩くことにより、「自分のまち」という認識を深めるのである。

表 1-2 行政のまち歩きへの取り組み<sup>14)</sup>

まち歩きの種類	具体的事例
歩行空間の整備	コミュニティ道路 河川、公園等の利用・緑道整備 商店街の整備
ガイド・パンフレット・マップの発行	文化財、史跡 地形地物（街道、橋、地名、風景） 古地図の紹介 文人筆跡の紹介 自然観察 公共建築物 公園
まちづくり	百景などの調査 新名所づくり （博物館、複合公共施設など）
まちづくりの設計	福祉のまちづくり設計
市民の関心の喚起	白書作り 百景の公募
イベント型事業	まちづくりイベント タウンオリエンテーリング

表 1-1 は行政の取り組みを類型化して表にまとめたものである。行政のまち歩きに関する動きは、情報提供型の広報・文化財研究や史跡案内 応募葉書型の参加・百景の制定 発見型の活動・体を動かして行うイベント<sup>15)</sup>という3段階をたどっているが、現在盛んなのがイベント型のまち歩きである。このようなまち歩きイベントの特徴について近藤は次のように図化した。



図 1-4 「まち歩き」の特徴<sup>15)</sup>

このようなまち歩きの特徴を踏まえた上で、まちの解釈の仕方を仕掛けとして織り込んだイベントを近藤は「まち巡りイベント」と名づけた。そのイベントを通じて参加者はある「役割」を体験する。そのことでまちに対する自分なりの環境像を形成し、まちへの認識を深め、同時に問題点などの発見が出来る。次の図は「役割」の類型別の、まち歩きの形態について近藤がまとめた表である。

表 1-3 役割 のパターンからみた「まち体験行動」の形態<sup>16)</sup>

型	人における効果	場における効果	内容の演出視点	イベントの事例	代表事例
萌芽型	楽しむ まちへの愛着形成 人と知り合う	場の提供 場のPR	自由な雰囲気 楽しさを演出 交流を演出	御輿（まつり） ウォークラリー サロニング	『杉並「知る区」ロード』
提案型	まちを発見する 自分で問題を探す	まちの魅力誘引 まちの見方開発	発表の場必要 まとめる場必要 その後どうするか	ウォッチング 環境カルテ 「まち遊び」	『豊中おもしろ探偵団』
評価型	まちの意味を理解 まちを知る学習する まちの意外な面認知	まちへの認識 まちへの評価	コンセプト明確化 評価感想受け止め	パレード 「まちめぐり」 自然観察会	『九輪の台地』
発表型	楽しむ、知る	利用促進 広報宣伝	楽しさを演出 魅せる努力 分かりやすく説明	記念パレード 歩いてみよう 〇〇道歩き初め	『出雲街道 NOW IN 津山』

「まち巡りイベント」を体験した参加者は、それぞれイベントによって日頃気付かなかったことを発見し、歩いた場所から受けた印象をもちかえる。そのイメージが参加者それぞれの思いをひき起こし、個人のアイデンティティを形成する。その個人のまちに対する批評がまちづくりに反映されるシステムが必要である。このようなイベントを地域の住民が体験し、更にまち歩きが日常の活動につながれば個人の視点は常に更新され、まち歩きは個人と行政

にとってより意味のあるものとなり得る。

## 1-2 研究の目的・意義

本研究の目的は、これまでに研究されてきたまちづくりにおけるまち歩きと考現学的な路上観察の特徴を背景に、「名づけ」という仕掛けを用いた路上観察の可能性を探ることである。本研究の対象である『なにわ町方あきんど会』（以下あきんど会）はこれまでに、「名づけ」概念の研究対象として取り上げられている。また、同会はまちづくりイベントの参加者に与える影響の評価の研究対象としても取り上げられた。しかし具体的にあきんど会の活動の記録である引札の分析を行った研究はない。その点で本研究は意義があると言える。

## 1-3 研究の構成

本研究の構成は図の通りである。

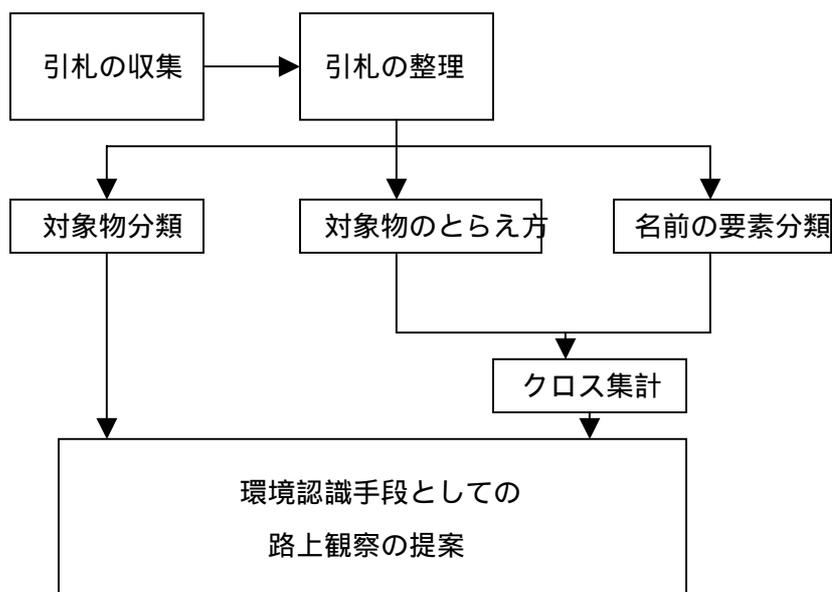


図 1-5 研究のフロー

[ 参考文献および引用文献 ]

- 1) 新明解国語辞典,三省堂(2000)
- 2) 松田良一:散歩の詩学サンポロジー,p149,駸々堂(1988)

- 
- 3) 今和次郎:考現学入門,p67,ちくま文庫(1993)
  - 4) 商品科学研究所と株式会社 CDI が 1975 年から始めた、家庭における生活財の種類の数や配置についての詳細な調査。
  - 5) 1974 年に三重県鳥羽市でフィールドワークを行って以来まち歩きの同志的集まりとして活動を開始した名古屋の団体。
  - 6) 岡本信也 + 岡本靖子:超日常観察記,p67,情報センター出版局(1994)
  - 7) 吉岡哲:環境計画における(名づけ)概念の考察と手法化に関する研究,大阪大学大学院環境工学専攻修士論文,p5(1994)
  - 8) 市村弘正:「名づけ」の精神史,p4,みすず書房(1987)
  - 9) 市村弘正:前掲書.p23(1987)
  - 10) 市村弘正:前掲書.p8(1987)
  - i11) 鳥越皓之編:講座環境社会学 第3巻 自然環境と環境文化,有斐閣(2001)
  - 12) 吉岡哲:環境計画における《名づけ》概念の考察と手法化に関する研究,大阪大学大学院環境工学専攻修士論文,p5(1994)
  - 13) 出口顯:名前のアルケオロジー,p38,紀伊国屋書店(1995)
  - 14) 八尾哲史:地図遊びとまち歩きを通じたまち環境学習に関する研究,大阪大学大学院工学研究科環境工学専攻修士論文,p114(1990)
  
  - 15) 近藤隆二郎:環境イメージの発達過程における役割行為の意義と効果に関する基礎的研究,大阪大学大学院工学研究科環境工学専攻博士論文,p38(1994)
  - 16) 近藤隆二郎:環境イメージの発達過程における役割行為の意義と効果に関する基礎的研究,大阪大学大学院工学研究科環境工学専攻博士論文,p39(1994)